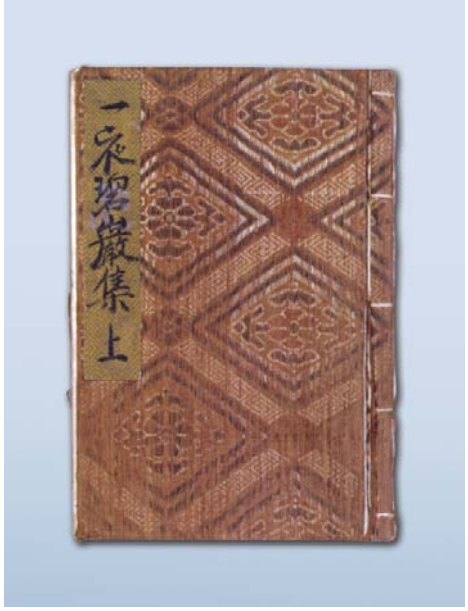
石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第362号　平成25年12月1日発行

金銀象嵌花鳥人物文薄端　銅器会社
明治の工芸より



重文 仏果碧巌破関撃節
大乗寺の文化財より

■ 名物裂と遊戯具　前田育徳会尊経閣文庫分館

■ 大乗寺の文化財　第２展示室

■ 木版の美　第３展示室

■ 銅像　第４展示室

■ 明治の工芸　第５展示室

■ ふれる美術　第６展示室

- 企画展示室のご案内
- 12月の行事予定
- 展覧会回顧「俵屋宗達と琳派」
- 現地見学報告
- 企画展Topics

小林清親　本町通夜雪
木版の美より

前田育徳会尊經閣文庫分館

名物裂と遊戯具

11月20日(水)～12月15日(日) 会期中無休

「作品名が難しくて、わからない」という質問をよく頂戴します。特に、漆や染織といった工芸品の作品名として用いられる「技法」と「文様」を並べた漢字ばかりの作品名が難解に映るようです。例えば、「小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴」。小さな石畳のように織り出された布地に、宝珠形の雲に囲まれた鳳凰の文様を持つ金襴という意味なのですが…。

ところで、茶道では、点前において用いられた道具について、亭主と客の間で問答があります。「お茶入は？」「お窯元は？」の後は「お仕覆の裂地は？」と続きますが、「興福寺金襴です」の返答に、難しさはありません。「興福寺金襴」、別称「小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴」は、名物裂の中でも特に古い「ねぬけ(年代のない)」と珍重された裂です。興福寺の帳(とばり)に用いられたと伝わることから、こう呼ばれます。

中世から近世初期にかけて日本へ渡った染織品のうち、寺社や大名家に伝わり、茶入の仕覆や掛軸の表装として用いられた裂を名物裂といい、特に茶人や好事家たちに選ばれた裂は、このように特定の名称で呼ばれました。角倉了以愛用の「角倉金襴」、大徳寺の帳に用いられたという「大徳寺金襴」、古田織部愛用の「織部緞子」などです。

本特集では、前田育徳会に伝わる名物裂の中から、名物裂三十一点と、香道具・遊戯具など計三十七点を紹介します。

「小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴(興福寺金襴)」

第2展示室

大乗寺の文化財

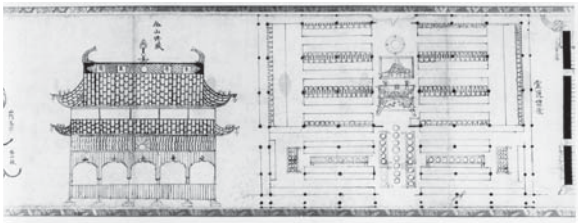
11月20日(水)～12月15日(日) 会期中無休

大乗寺は鎌倉時代末、加賀の守護冨樫家尚(いえひさ)の創建とされ、現在の野々市市に真言僧の澄海(ちょうかい)を住持させたことに始まると伝えられています。永平寺の徹通義介(てっつうぎかい)を招いて禅寺としたことにより、大乗寺は永平寺以外では最初に建てられた曹洞宗寺院であるとして「曹洞宗第二の本山」とも称されることになります。

その後、大乗寺二世瑩山紹瑾(けいざんしょうきん)、三世明峯素哲(めいほうそてつ)の時期に基礎が築かれ、室町時代には足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷が安堵されました。しかし一向一揆により国主冨樫氏が倒されて保護者を失い、さらに一揆を平定した柴田勝家の兵火によって、堂宇も焼失してしまいました。

加賀藩の治政になって復興が行われ、二代藩主・前田利長の時代、金沢木の新保(現在の金沢市本町)に移転・再興されました。さらに本多政重により、本多家下屋敷の隣接地である大乗寺坂下(現在の本多町)に移転します。その後藩より与えられた現在の地に移転し、今日に続くことになるのですが、今でも県立工業高校から石引台地へ登る坂を大乗寺坂と呼んでおり、かつての名残をとどめています。

当館には大乗寺より古文書・絵画などが一括寄託されています。重要文化財『佛果碧巌破関撃節(ぶっかへきがんはかんきゃくせつ)』(一夜碧巌(いちやへきがん)集)をはじめとする、大乗寺の文化財をこの機会にご鑑賞ください。



重要文化財「支那禅刹図式」

第3展示室

木版の美

11月20日（水）～12月15日（日） 会期中無休

平成十七年に久世靖氏より一括寄贈を受けた三〇一六枚におよぶ浮世絵版画コレクションの中から、明治に活躍した浮世絵師・小林清親と、大正「新版画」の創作に力を注いだ伊東深水、橋口五葉、川瀬巴水等の作品を展示します。

江戸時代に庶民に愛された浮世絵は、明治に入り新たな展開をみせます。小林清親は、闇夜に浮かぶ光や暁の空、雨に濡れる地面など、自然をありのままに捉えた木版画を制作し、浮世絵の新境地を開きます。伝統的な手法では、墨の輪郭線を主版として色版を刷り重ねますが、清親は輪郭線を使用しない、もしくは薄い茶色を用いました。それは線よりも面を主役とし、光の変化や水の動きなど、形をもたないものを表現する試みでした。清親の作品は「光線画」と呼ばれ人気を博します。しかし、もともと印刷物としての役割が大きかった浮世絵は、写真や石版画などの新しい技術に勝てず、一度は衰退への道をたどります。

そして大正期、自画・自刻・自摺の創作版画運動が展開される中、新しい時代の浮世絵を目指した版元の企てにより、新版画が誕生します。新版画は、むらのある摺り方をしたり、同じ色を何度も重ねて画面に深みを持たせたりと、画期的な技法・表現で制作され、木版画の可能性を広げてゆきました。

今回の特集で、明治・大正の木版画がもつ独特の魅力を是非、ご堪能いただければと思います。

小林清親「東京両国百本杭暁之図」

第5展示室

明治の工芸

11月20日（水）～12月15日（日） 会期中無休

今日、一般に使われている「美術」や「工芸」という言葉は、明治期に至るまで、わが国では使われていませんでした。それが明治維新後、欧米から新しい思想や技術、制度がもたらされ、「美術」「工芸」という概念が生み出されていきました。

「工芸」の分野では、当初、伝統的なわざを殖産興業政策に生かして、制作品の販路を海外に求めました。とりわけ、明治六年に開催されたウィーン万国博覧会において、わが国からの出品作品が人気を博したことから、海外の需要を強く意識した表現が作品制作の上に反映されていくことになります。

その表現は、過剰ともいえる装飾性の強いもので、陶磁器の絵付けにみられるような、伝統的な画題を絵画的に描いた作品、たとえば赤丸雪山作《金襴手八岐大蛇退治図双耳花瓶》、九谷庄三作《色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶》、宮荘一藤作《色絵金彩釈迦羅漢図花瓶》などがあげられます。また、漆器を絵画的な額装の形式に表現した柴田真哉作《蒔絵釣燈籠図額》、柴田是真作《蒔絵蕗に小鳥図額》や、さらに金工では、写実的な意匠表現をみせる銅器会社製《金銀象嵌花鳥人物文薄端》、初代山川孝次作《金銀象嵌草花文鳥籠置物》をあげることができます。こうした作品からは、美術（絵画）と工芸の未分化な時代の面影をうかがうことができるでしょう。

赤丸雪山「金襴手八岐大蛇退治図双耳花瓶」（きんらんでやまたのおろちたいじずそうじかびん）

第4展示室

銅像

11月20日(水)～12月15日(日) 会期中無休

「銅像」と聞いて皆様は何を思い出すでしょうか？お年を召した方なら立派なヒゲを生やした軍人さんや、礼服姿で威厳のある雰囲気を漂わせる政治家像を思い出すかも知れません。また高名な学者や地域の発展と公益に尽力した偉人の胸像。さらに学校の門の脇に立っている二宮金次郎像を思い浮かべる方もおられることでしょう。さらに人によっては展覧会場で見るのと同じ女性裸像や筋骨逞しい青年像から鋳銅製の抽象作品を含めたアート作品をイメージした方。そして最も歴史があるところの鋳銅製の仏像を思い描いた方もおられることでしょう。

今日、一般的に銅像は、記念碑的な要素を含め、屋外に建立される鋳造銅合金製の像を指すことが多いようですが、みてきたように銅像は多様なイメージで捉えられています。

明治維新以降、急速に近代化と西欧化を進めたわが国では、それまではなかった銅製で屋外設置の人物彫刻の制作と建立が普及定着して、多くの銅像が建てられるようになりましたが、太平洋戦争時の金属供出で悉く姿を消します。しかし戦後復活するや以前にも増して普及発展するという近現代史を物語る資料としての側面も見えます。展示では鋳銅製の置物に始まり各種肖像彫刻と首作品を中心にご覧いただくもので、特に人物像の肖像性と顕彰性についても眺めるものです。

吉田三郎「高峰譲吉像」

第6展示室

ふれる美術

11月20日(水)～12月15日(日) 会期中無休

平成二十一年一月「遠き道展」と題した現代日本画の展覧会が当館で開催されました。この展覧会は、全国十七の会場を巡回し、現代日本画の潮流と視覚障害者のための平面鑑賞の方法を紹介するものでした。

視覚の障害を補う平面作品の鑑賞方法は、大別すると二通りです。一つは言葉による説明を通して作品と向き合う方法で、これには再生装置による音声ガイドと、ボランティアとの会話という方法が採られました。もう一つは触覚を通して作品を理解しようとするものです。立体コピーや触図録、点図、さらには縮尺レリーフなどに触れることで、作品を立体的に把握しようとする試みです。

平成二十四年に当館は「遠き道展」の主催者より、石川県関係作家の作品と縮尺レリーフなどが付属している作品をあわせて十二点の寄託を受けました。今回の特集では、その中から六点の本画と、それに付属した触れることの出来るレリーフなどを展示します。また彫刻分野から当館所蔵品より、ブロンズ、FRP、石など素材の違う作品を六点出品します。こちらも直に触れてみて質感やボリュームなどを感じ取り、彫刻の魅力を味わって頂きたく思います。本特集で展示する彫刻や日本画のレリーフは、視覚障害者のみでなく晴眼者もご利用頂けます。

ミュージアムにおいて施設面のバリアフリー化が進む中、今後、最も中心となるべき作品鑑賞が、全ての人に適切に提供されることが大事なのではないでしょうか。

縮尺レリーフにふれる

第7・8展示室

石川県立工業高等学校 工芸科

30周年記念作品展

11月20日(水)～24日(日) 会期中無休

石川のみならず日本の近現代工芸の形成と発展に、重要な役割を果たしてきた石川県立工業高等学校の「工芸」の歴史を継承・発展させるため、昭和五十九年に設置された工芸科は、本年で三〇周年の節目の年を迎えました。その間、多くの優れた人材を輩出し、工芸王国石川の発展に多大な貢献を果たしています。

本作品展は、在校生から公募展や個展で活躍中の若手中堅作家、工芸科で教鞭をとった教職員の秀作など約一四〇点を一堂に集め、工芸科の歴史を一望することが出来る、大変見応えのある展示となっています。ぜひこの機会に「県工工芸科」の意欲作をご鑑賞ください。

◇入場無料

◇連絡先／金沢市本多町二―三―六
石川県立工業高等学校 工芸科 主任 鶴野俊哉

第7・8展示室

第98回

公募写真展研展

11月27日(水)～12月1日(日) 会期中無休

東京写真研究会が主催する研展は、関東、中部、関西、北陸の四支部で構成され、公募展は四支部巡回で開催されています。

会員部門と公募部門に分けられていて、今回は三八〇点の作品が展示されます。

北陸支部においての入賞者は、会員部門が四名、公募部門は五名となりました。

合評会は十二月一日(日)午後二時より行います。

◇入場無料

◇連絡先／金沢市東山二丁目二―八
土田貴夫
TEL ○七六―二五一―○七二三

第9展示室

第37回 公募日創展＆

新院展選抜金沢展

11月22日(金)～24日(日) 会期中無休

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年三十七回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画一〇〇点余を展観。また、新院展選抜金沢展に出品された秀作も多数展示致します。

◇主な出品者
北出朝之・保科誠・柴田輝枝・村中博文・南好乃・中村勝代・大窪昭子・牛丸美代子・北川真理子・松尾功一朗・伊藤夏子

◇入場無料

◇連絡先／金沢市窪一―二二三
丹羽俊夫
TEL ○七六―二四四―五九一六

第9展示室

第2回

金沢玄心会会員展

11月29日(金)～12月1日(日)会期中無休
(午後5時で閉室)

金沢玄心会は、書における古典研究と創作を目的に三年前に立ち上げ、微力ながら研鑽を積んでまいりました。その本部は、神戸にあって、芸術院賞受賞者劉蒼居先生が設立された組織で、以来二十八年になります。

二回目となる今回の会員展には、幅広い年齢の人達が、日頃勉強している古典を基本に、作品をつくってまいりました。主に、漢字作品が多いのですが、調和体、古典の臨書作品などを、二・八や半切の大きさで出品しています。

総人数五十名足らずの小さな組織ですが、日頃の研鑽の成果が作品に出ていますかどうか、ご高覧くだされば まことに幸甚です。

◇入場無料

◇連絡先／小松市島町ル十八
金沢玄心会代表　中川青玲
TEL ○七六―四四―四二六五

第7展示室
第31回

二科会 写真部 石川支部公募展

12月4日(水)～8日(日) 会期中無休(午後5時で閉室)

二科会写真部石川支部は、大竹省二先生をはじめとした創立会員の方々の示唆を得て一九七九年に創立されました。中央展の会派として、地域の写真技術の向上と表現の開拓に挑む団体です。二科会の精神を尊重しながら、新しい価値の創造に向かって不断の発展を期しています。

公募展は、支部員相互の親睦と写真技術の成果の発表を目的に開催します。今年度は二科会写真部会員の森井禎紹先生の審査の結果、厳選作品七十点が展示されます。

◇入場無料

◇連絡先／(一社)二科会写真部石川支部長　高浜八郎
TEL ○七六―二四四―五〇八四

第7～9展示室
平成25年度

志賀町を描く美術展 金沢展

12月11日(水)～15日(日) 会期中無休

「志賀町を描く美術展」は、その名のとおり志賀町に関する題材を描いた絵画作品を展示している展覧会です。

例年、招待作品から県内外の一般作品まで約二百点余りの洋画・日本画・水墨画・水彩画・版画などの作品を志賀町と金沢市の二会場にて展示しております。

◇入場無料

◇連絡先／羽咋郡志賀町高浜町カの一の一
志賀町生涯学習センター
TEL ○七六七―三二―二九七〇

第8・9展示室
第23回

石川独立DO展

12月5日(木)～8日(日) 会期中無休

日本的フォーヴィズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、昭和五年に結成され、須田国太郎や林武など、自由で個性強烈な作家を輩出していることで知られる日本有数の団体展です。

石川独立は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足し、今回二十三回展を迎えます。メンバーは各自三～五点を出品し、会期中の十二月七日(土)には批評会を行います。

◇出品作家
大部雅子、金子顕司、京岡英樹、桑野幾子、田井淳、西又浩二、堀一浩、前田さなみ、三浦賢治、村上有輝、**協力出品**　乙部久子、桜井節子、寺島穣、吉川信一

◇入場無料

◇連絡先／堀一浩
TEL ○七六―二四六―〇七一一

十二月の行事予定

■百万石の文化講座	午後1時30分～　聴講無料　美術館ホール
1日(日)	第2講　利常と交流のあった文化人たち　横山方子氏　石川郷土史学会幹事
■土曜講座	午後1時30分～　聴講無料　美術館講義室
14日(土)	美術にみる色・赤その2　西田孝司 担当課長
21日(土)	加賀藩前田家の能装束　村上尚子 学芸主任

展覧会回顧

俵屋宗達と琳派

会期：平成25月9月14日（土）～10月14日（月・祝）

石川県立美術館の開館三十周年と金沢宗達会の創立百年を記念して開催された本展は、地域の視点を明確にしつつ、俵屋宗達や尾形光琳の表現世界の背景を深く掘り下げた点で従来にない独自性を打ち出しました。琳派といえば、意匠主義的な装飾性を特徴とした精神性とは無縁の世界と思われがちですが、その点が宗達、光琳と江戸時代末期以降の包括的な琳派の画家たちを峻別するものとの観点から、総花的な琳派展とはせずに、対象を俵屋宗達、俵屋宗雪、喜多川相説、尾形光琳に絞りました。

琳派の親しみやすさを再認識していただくとともに、その思想的な深さにも注目していただきたいとの趣旨から、今回は宗達、光琳の作品の特質である趣向性に留意をしつつ展示構成を行いました。その点を広く理解していただくために、会期中に開催される土曜講座を連続講座とし、図録の解説、ギャラリートークと連動した内容としました。その結果講座には従来の二倍以上の方が来聴され、図録の売れ行きも好調でした。そして展覧会には目標を大きく上回る約二万人の方が来場され、当館で開催された近世絵画の展覧会では過去最高の入場者数となりました。

こうした成果は、ひとえに今回貴重な作品をご出品いただいたご所蔵者のご高配の賜物であり、ここに改めて深く感謝申し上げます。本展が二〇一六年の光琳没後三百年に向けた、新たな琳派ブームの先駆けとなったとすれば幸いです。

第四十四回 文化財現地見学報告

平成二十五年十月五日（土）～六日（日）

「国宝 薬師寺展」にちなみ企画した今回の文化財現地見学旅行は、題して「飛鳥から奈良へ―日本文化のはじまりを訪ねて―」。奈良県明日香村から奈良市を巡り、文化の変遷と歴史を感じていただこうというものでした。

旅行初日は日本古代史の舞台、明日香村へ向かいました。心配していた天気も徐々に晴れ、正午頃に橘寺へ到着。本堂で僧侶のご説明を受けた後、本坊にて昼食となりました。精進料理は参加者の皆様にも好評で、たおやかな姿を見せるこの寺院を堪能できたことと思います。

次の石舞台古墳からはボランティアガイドが同行し、熱のこもったお話で明日香村をご案内いただきました。石舞台の大きさや古代の知恵に圧倒されながら、続いて飛鳥寺へ向かいます。ご住職に「飛鳥大仏」を前に解説いただきながら鑑賞し、歴史に思いを馳せるひと時となりました。一日目最後は飛鳥資料館です。発掘成果や石造物など飛鳥文化が見える展示となっており、この日のまとめとなりました。

二日目は朝から薬師寺へ参りました。「国宝 薬師寺展」のお礼参りを兼ねた拝観ということで、僧侶や職員の方々が境内をじっくりとご案内くださいました。丁寧なご説明に、過去から現在に至る薬師寺の歴史を実感することができました。

次に訪れた唐招提寺では、特別開扉中だった御影堂の国宝・鑑真和上坐像と東山魁夷の襖絵を中心に見学しました。自由鑑賞となってしまいましたが、皆様それぞれに天平の香りを楽しまれたようでした。

昼食を挟み、最後は秋篠寺です。趣ある境内を進み、本堂にて技芸天などの仏像と出会いました。僧侶のご解説で諸像が今に伝わる経緯を知り、歴史の奥深さを感じ旅行の締めくくりとなりました。

二日間の行程を無事に完了できましたのも参加者の皆様の温かいご協力のおかげと感謝しております。友の会では、これからも皆様の期待に応えられる内容を検討して参ります。

企画展 Topics 石川県立美術館名作の森 平成25年12月21日(土)～2月11日(火・祝) 会期中無休

石川県立美術館が所蔵する三、二二〇点の作品から、人気投票で展示作品を組み立てるという試みの「石川県立美術館 名作の森」。最終的な得票数は展覧会でご紹介しますが、これまでの集計では「色絵雉香炉」が第一位となりました。

古美術部門では、古九谷や久隅守景筆の「四季耕作図」や岸駒筆「虎図」が人気でした。近現代の工芸分野では、松田権六作「蓬莱之棚」が最上位となりました。作品の特質上、展示される機会の限られる工芸作品ですが、三代徳田八十吉作「燿彩鉢」や木村雨山作「麻地友禅瓜模様振袖」など、根強い人気をうかがうことができる内容でした。

絵画彫刻部門では、鴨居玲に人気が集まりました。「1982年私」「望郷を歌う」が上位に入り、高光一也、長谷川八十、吉田三郎などの作家が名前を連ねました。一方で数年に一度しか展示されない横山大観筆「長江の朝」にも多くの票が寄せられました。また投票のための参考として「名品図録」掲載の作品を一覧にしましたが、そこに載っていない作品にも数多く投票が寄せられており、当館の所蔵品をよく御存じだなという感想を持ちました。

皆さんの声を反映した「石川県立美術館名作の森」。十二月二十一日の開幕をどうぞご期待ください。

国宝　色絵雉香炉

松田権六「蓬莱之棚」

鴨居 玲「1982年 私」

次回の展覧会

会期：12月21日(土)～2月11日(火・祝)
休館日：12月29日(日)～1月3日(金)

前田育徳会尊經閣文庫分館	1F企画展示室
新春優品選 ―前田家の調度―	石川県立美術館 名作の森

第2展示室	第3展示室	第4展示室	第5展示室	第6展示室
石川県立美術館　名作の森				
古美術	油彩画	彫刻	近現代工芸	日本画

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円(280円)
大学生　280円(220円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第１月曜日はコレクション展示室無料の日(12月は2日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

12月の休館日
16日(月)～20日(金)・29日(日)～31日(火)

広告
毎週水曜日は
Meiカード ポイントプラスデー
Meiカード通常ポイント ＋ 3% ポイントプラス
※催事場、地階食品売場などやご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。
MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ
金沢 むさし TEL(076)260-1111(代)
www.meitetsumza.com
10時→20時(地階レストラン街・書籍は21時まで)

石川県立美術館だより
第362号〈毎月発行〉
2013年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町２番１号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/